

鈴木有郷牧師説教

9/12/10 迷える羊の譬えーその意味は？ ルカ 15:1-7

迷える羊の譬えはイエスのたとえ話の中でも良く知られたものの一つです。今朝読んで頂いた聖書の箇所がそれです。この譬えにはどのような意味が込められているのでしょうか。

イエスの時代のエリートは、宗教的戒律に詳しいパリサイ派と呼ばれる人々でした。彼らはモーセの律法を解釈する資格を持っているだけではなく、律法を遵守する最も立派な人間だと自他ともに認めていたのです。

しかし、多くの民は、特に貧しい人々は、戒律を守ろうとしても守れない人々でした。断食の戒律一つ取っても、貧困層の人々は毎日が断食のような状態でしたから、とても特別に断食の戒律を守るなどできる相談ではありませんでした。

パリサイ派の人々はこれらの民を、律法を守らない不遜な輩と断じ、罪人と呼んで排除していたのです。

イエスの振る舞いはパリサイ派のそれと対照的でした。彼は社会のエリート達から忌み嫌われていた人々と食事を共にし、酒を酌み交わし、時には彼らの家で一夜を過ごしたこともあったのです。パリサイ派の人々がそれを見て、憤懣やるかたない思いに駆られたのは、今朝読んで頂いた聖書の箇所にも明らかです。「何だ、この男は。罪人と一緒に食べたり、飲んだりしているではないか。」

この批判に答えるために語られたのが、迷える羊の譬えなのです。

100匹の羊の世話をしていた羊飼いが、夕方数えてみると一匹足りません。彼は99匹の羊を野原に残して、世を徹して一匹の羊を見つけるために歩き回ります。やっと見つけると、羊飼いはその羊を肩に担いで家に連れ帰り、お祝いの晩餐をしたと言うのです。

この譬えの意味は二つに絞られます。一つ、パリサイ派の人々とイエスは、生き方に関して全く正反対だということです。パリサイ派の人々は貧しい人々を拒否しました。イエスは彼らを迎え入れました。パリサイ派の愛は律法を守る人々へのものでした。イエスの愛は彼らが排除した人々に向けられていました。

二つ目、この譬えは人間の人間らしさを明確に定義します。人間の人間らしさとは、律法の遵守にあるのではないのです。それは、あくまでも羊飼いにいるような弱者や貧しい人々への慈しみであり、優しさだ、と言うのです。

以上のことを心に留めると、この譬えが実は、現代を生きる私たちに与えられたものであることが明らかになります。

ここでも私たちへのメッセージは二つの点に絞られます。

一つ、この譬えは、私たちが実は律法学者と変わらないという事実を私たちの面前に突きつけます。私たちがまた他者を卑下したり、他者を排除して、それがあたかも神の思いでもあるかのように主張したりすることがあるからです。神を私たちの考え通りに作り替えてしまうことがあるからです。

そして二つ目、この譬えは、現代の私たちにとっても、人間の人間らしさは、慈しみであり、優しさであることを明らかにしてくれます。何故なら、羊飼いのように私たちが育み給う神は無限に慈しみ深く、徹底的に優しくられるからです。

つまり、迷える羊の譬えは、私たちに、律法学者のようであることを止め、イエスに従いなさい、と勧めているのです。毎日の生活の中で、パリサイ派のように振る舞うことを止めて、神の思いに適う人間として暮らさなさい、と勧めているのです。

思えばこれは大変なことです。ちょっと待つてくださーと言いたくなるような重い課題です。あなたはそこで困惑し、げんなりし、座り込んでしまうのでしょうか。

その必要はないのです。何故ならイエスは私たちの人生の一瞬、一瞬を私たちと共に歩んでくださるからです。常に私たちに勇気づけ、慰め、希望を与えてくださるからです。

このことに気づく時、私たちの抱く困惑や当惑は、そうだ、是非そのように生きようという勇氣と心意気に変えられるに違いありません。羊飼いであるイエスの肩にかつがれている自分自身を発見するに違いありません。